

愛知県震度観測・調査報告書 - 第27報 - の概要

1 調査の概要と目的

この調査は、地震動の伝わり方や地域特性を明らかにするため、県内全市町村に設置している計測震度計による震度情報ネットワークの震度観測データ等を活用して、平成19年1月～12月に発生した地震と震度に関する調査結果をまとめたものである。防災対策の基礎資料、県民の地震に対する理解を深めるために活用されることを目的としている。昭和56年より1冊/年で発行しており、本書で27冊目となる。また、トピックスとして、最近の地震研究などに関する話題を掲載した。

2 愛知県震度観測・調査報告書 - 第27報 - の概要

(1) トピックス

(名古屋大学大学院環境学研究科 山田功夫教授)

ア 移動する深部低周波微動活動

深部低周波微動は、東海から四国にかけての深さ約30kmで発生している、数分から数10分の間、人体では全く感じないほどの非常に小さな振動が続く現象である。この現象については、現時点ではよく分かっていないことが多いが、大地震の想定震源域周辺で発生していることから、大地震の発生を予測するうえで、大変重要な現象だと考えられている。ここでは、防災科学技術研究所の調査研究で明らかになった、東海・東南海地震の想定震源域における深部低周波微動の連続的な移動について紹介している。

イ 直下型地震時の最大加速度

地震の揺れの強さを表すものの一つに加速度がある。一般的に、地震の力が大きければ、加速度は大きくなる。現在の建造物の耐震性を満たすために予測される最大加速度は、観測点が少ないころの観測データを基に設定した基準であるため、小さく見積もられていると考えられる。観測点が密になり、震源近くでの観測のチャンスが増したことやデータが蓄積されたことなどにより、従来と比べ正確な予測が可能となった。こうしたことから、耐震性を満たすための最大加速度の基準や震度予測について問題点を提起している。

(2) 震度観測資料

ア 国内外の主要地震

平成19年に、国内で、被害を伴った地震の発生は8回であり、死者・行方不明者を伴う地震の発生は2回であった。

平成19年に、世界で、人的被害を伴った地震の発生は53回であり、死者10名以上の地震の発生は9回であった。

イ 愛知県内・近郊の震度観測

平成19年に、県内のいずれかの市町村で、震度1以上が観測された地震の発生は43回であった。なお、震度4以上が観測された地震は発生していない。

3 調査研究成果の活用

調査報告書は、防災会議に報告するとともに、防災関係機関、市町村に配付し、地震防災対策の基礎資料として活用する。

また、県民が自由に閲覧できるように公立図書館、県民生活プラザ等に配付し、地震についての理解を深めてもらう。